

タイトル (MS 明朝/10.5P/中央揃え)
——サブタイトル—— (10.5P/中央揃え)
(10.5P 2行挿入)

氏名 (大学名のみ記入) (10.5P/右端揃え)

→本文はここから (日本語: MS 明朝、英数字: Times New Roman、10.5P) です。
これは、全日本音楽教育研究会大学部会の会誌を執筆する際のテンプレートです。
ここに上書きすることで、自動的に作成要領に示されたページレイアウトになるよう設定されています。以下、執筆の方法について記述してありますので、ご参照ください。

1. 書式設定

(1) 執筆にあたって

Microsoft Word にて原稿を作成して下さい。不可能な場合は、他ソフトで作成したもの (ソフト名を明記) に加えて、テキストファイルも添えてご提出下さい。

なお、このテンプレートに上書きするか、同じ書式で執筆することによって、印刷時のイメージが明確になり、編集時のトラブルを減らすことができます。

(2) ページレイアウトについて

ページレイアウトの詳細については、次の通りです。設定を確認して、字数の上限以内に必ず収めてください。

i 字数: 50 字×50 行 (A4 版)、7 頁以内 (図、表等を含む)。

ii フォント: 日本語は MS 明朝、英数字は Times New Roman、10.5 ポイント。

iii 余白: 上 20mm、下 20mm、左 20mm、右 20mm。

(3) 本文中の項目

○章、○節とせず、1. (1) i を使用します。数字をふった箇所には必ず見出しを付けてください。

(4) 文体

文体は、「である」調とします。

(5) 全角文字と半角文字

和文では、漢字、ひらがな、カタカナのほか、句読点や括弧等の記号を含め、原則として全て全角文字を用います。数字は桁数に限らず半角とします。西暦年号以外で 4 桁以上の場合は、3 桁ごとに半角のカンマ (,) を付けてください。

(6) 欧文

本文中に欧文を書く必要がある場合には、すべて半角文字を用います。大文字だけの単語であっても、欧文文字には半角文字を用います。名前の一部を頭文字だけで表す場合などは、省略を表すピリオドを打ち、その後に半角スペースを入れてください (例: J. S. Bach)。

(7) 記号類

和文の際には、原則として疑問符?や感嘆符!を使用しないでください。

欧文の諸記号類 (. , : ; ? !) には半角文字を用い、これらの後には半角スペースを入れてください。

2. 執筆例

(1) 挿入する表・図・写真等

表および図、写真、譜例については、実際に貼り込む大きさと、データ化したものを文中に挿入します。

表や図、写真、譜例には、それぞれ通し番号とキャプションを付けます。表の番号とキャプションは表の上に、図、写真、譜例の番号およびキャプションはそれぞれの下に挿入してください。

(2) 肖像権、著作権等

肖像権、著作権に関連して必要となる許諾は、投稿者が責任をもって投稿前に得ていることを掲載の条件とします（必要に応じて、許諾番号を明記してください）。

その他（たとえば現場研究などにおける個人情報の取り扱いなど）、倫理上の諸問題については十分な注意をはらってください。

3. 引用と注、参考文献表

他の文献を参照する際には、著作権等の侵害にならないように注意してください。

(1) 引用の原則

引用する場合には、引用頁を示して原文に忠実に引用します。短い引用（2行以下）は、「」でくくります。引用する文中に「」が含まれている場合、その「」は『』に置き換えます。引用文の末尾に句点があっても、地の文章がそのまま続く場合には、閉じた括弧の前の句点は不要です。

長い引用（3行以上）は上下を一行あけ、引用文の各行は左側を全角で2文字分、字下げします。

(2) 引用文の示し方と注の書き方

注は、本文に¹⁾（上付き片括弧）のように通し番号を付し、説明は本文末尾に文末注としてまとめて示します。

引用の例を見てみましょう。

櫻井（1998）が述べているように、「最後まで記述方式が統一されている必要」（p. 71）があります。このように、短い引用文の場合には文中に引用符で組み込んで示します。

他方、長い引用の場合には、前後1行と左端を1字下げ、次のように記載します¹⁾。

長い引用をこのように処理すれば、本文とはっきり区別できる。それゆえ書き手による文章でないことは一目瞭然なので、引用符は必要ない（ウィンジェル 1994、p. 72）。[引用者注：この引用は2行しかありませんが、例として適切であるため使用しました]。

この例では、文中に（ ）で引用文献の著者姓と発行年、引用頁がわかるように示しています。このような書き方のほか、著者名が主語になる場合は、先の短い引用文のように、（ ）内に発行年と頁数だけ記載する方法をとることもできます。櫻井（1998）は、「この方式は（中略）少なくとも社会科学の分野では世界的に認められているものである」と述べています（p. 69）。

(3) 参考文献表

本文中で引用、言及した文献は、【引用・参考文献】として、本文の最後に全て記載します。

欧文、和文の順に区別し、欧文は著者姓のアルファベット順、和文は五十音順に記載します。和文に翻訳された文献は和文の一覧に含めます。同一著者の文献は発行年の順に並べ、同一年に2冊以上ある場合は、2007a、2007b、と区別してください。

単行本は、著者姓名（発行年）『書名——サブタイトル——』出版社を示し、論文等は、執筆者姓名（発行年）「論文タイトル——サブタイトル——」『掲載誌タイトル』巻号、全文の掲載頁（pp. ○-○）を示します。執筆者不祥の場合は、書名・論文タイトルを冒頭にします。2行以上にわたる場合は、同一文献に関わる2行目以下は、左インデントを2字分下げてください（下記【引用・参考文献】参照）。

【注】

1) 引用文の扱いには様々ありますが、読者にわかりやすくするために、この方式で誌面の統一をはかっています。

【引用・参考文献】

ウィンジェル、リチャード J.（1994）『音楽の文章術—レポートの作成から表現の技法まで—』宮澤淳一・小倉眞理訳、春秋社。

櫻井雅夫（1998）『レポート・論文の書き方 上級 改訂版』慶応義塾大学出版会。

*なお、注および参考文献についても、本文と同じフォントサイズ、行間としてください。